

『殷富門院大輔集』の編纂態度

——贈答歌の改作をめぐる——

小林賢太

一 はじめに

私家集には自撰と他撰の別がある。自撰家集の場合、収録される和歌やその詞書等には、編者すなわち当該歌人自身の意図を反映した処理が施されているはずである。その方法は、和歌そのものの改作や詞書の推敲、さらには配列順序の入れ替えなど、さまざまなレベルに亘る。稿者はかつて藤原実定の家集『林下集』と弟実家の家集『実家集』を比較し、両集における贈答歌改作について考察した⁽¹⁾。その結果、『林下集』は読者を強く意識した家集であり、贈答歌にもかなりの手が加えられ、贈答時の原型そのままではない可能性が高いと判断した。一方、『実家集』は贈答歌を改作した形跡に乏しく、和歌は贈答時の原型に極めて近い形で収められていると考えた。こうした現象は歌人の家集編纂態度に起因するところが大きいだろう。つまり、家集にどのような加工を施しているかを考えるこ

とは、その編纂態度を解明することに繋がる。また個々の家集間だけでなく、同時代のいくつかの家集間における差異を複合的に確認していけば、その時代の私家集編纂の方法や傾向を解明することになる。本稿では『林下集』『実家集』と同時代の私家集『殷富門院大輔集』（以下、『大輔集』と称す）を取り上げる。『大輔集』収録の藤原隆信、源頼政、寂蓮らとの贈答歌の中には、相手の家集や他の歌集にも収められているものがある。それらを対象に、同じ贈答歌が集によってどのように異なるかを確認していく。そしてその差異から、『大輔集』の編纂態度や編纂方法の一端を考え、平安末期における私家集編纂という行為について考究していきたい。

まず『大輔集』と大輔について確認しておく⁽²⁾。殷富門院大輔（以下、大輔と称す）は平安末期の女房歌人で、父は藤原信成、母は文章博士菅原在良である。後白河院皇女亮子内親王に仕え、正治二年（一一〇〇）頃没したとされる。家集は二種類あり、一類本は文治元年（一一八五）から二年頃に完成し、さらに建久期に増補が行わ

れたと思しい。三〇五首から成り、自撰と考えられる。二類本⁽⁴⁾は、賀茂重保の勧進により賀茂社に奉納された寿永百首家集の一つであり、百十首から成る自撰家集である。二類本収載歌の約八割は一類本にも収められていることから、一類本は二類本の草稿を増補整理したものと考えられている。一類本には四季や恋、歌合などの和歌催事の歌以外に、多くの贈答歌が収められており、大輔の豊かな交際が覗える。まずは大輔と近い藤原隆信との贈答を見ていく。

二 藤原隆信との贈答歌

大輔と親しく交流していた歌人のひとりに藤原隆信がいる。隆信は為経（寂超）と藤原親忠女（美福門院加賀）との子であり、定家の異父兄に当たる。隆信およびその家集に関する研究は、井上宗雄、中村文などに詳しい論考がある。⁽⁵⁾ 家集は二種類あり、一つは寿永百首家集であり、寿永元年（一一八二）頃に成立した寿永本である。もう一つは元久元年（一二〇四）頃に成立したと思しき元久本であり、寿永本、元久本ともに自撰と推定される。

本節では大輔と隆信との贈答を比較する。まずは『大輔集』から次の贈答を挙げる。なお対応関係を整理するため、和歌にはアルファベットを、異同部分には傍線を付した、また留意しておきたい語には点線を付した。（これ以降の引用においても同様。）

九月つごもりに、ひとく秋のわかれをしむうたどもよま

れしついでに

(A) ゆく秋のわかれはいつもある物をけふはじめたる心ちのみする

かくてものがたりなどしくらして、かへられしに

(B) たづねくるかひこそなけれゆく秋のわかれにそへてかへるけ

しきは

かへし

右京権大夫たかのぶ

(C) ゆく秋のわかれにそへてかへらずはなにゆゑきみがをしむべき身ぞ

又

なかつかさのせうさだなが

(X) かぎりあらむ秋こそあらめ我をだにまてしばしともいはごこそあらめ

(大輔集 I・八〇〜八三)

森本元子は、この贈答がなされたのを定長（寂蓮）が中務少輔であった承安元年（一一七一）から二年頃の秋と推定している。⁽⁶⁾ なお隆信の官職名は家集編纂当時のこととしている。この時、大輔は四十二歳前後、隆信三十二歳、定長三十四歳前後であった。これと同じ折の歌が『隆信集』にも残されている。

九月つごもりの日、ある所に人くまかりあひて、歌よ

み連歌などして帰にしに、女房中より

(A) 年毎に秋のわかれは有ものをけふはじめたる心地こそすれあまたのなかなりしかども人く、かへしなくてほどへ

しかば

(Y) としごとにかはらぬ秋のくれもなほあふ人からとけふこそはしれ

かくてかへりしを、なほよびとゞめて

(B) 尋ねくるかひこそなけれゆく秋の別にそへてかへるけしきは

かへし

(C) ゆく秋のわかれにそへてかへらずはなにゆゑ君をしむべき

身ぞ

(隆信集Ⅱ・八〇六―八〇九)

和歌に異同はあるものの、(A)と(A)、(B)と(B)、(C)と(C)は同じ歌と判断でき、両集の記述は同じ折の事である。これらに関して森本は、「詠歌の場所は大輔集とあわせて亮子内親王邸、女房の中より詠じたのは大輔であることが知られる」と注している。両集を見ると隆信や同座の人々が帰っていくのに対し、大輔は見送る側であり、この詠歌の場が内親王邸であった可能性は高い。あるいは大輔邸であったかもしれない。(X)を詠んだ定長は俊忠男俊海の子であり、叔父俊成の養子となっているから、隆信、定長ともに俊成に連なる家系の人物である。

両家集の差異について確認すると、定長歌(X)と隆信歌(Y)の有無や、人名臚化の程度差などもあるが、(A)と(A)の大輔歌に大きな異同がある。どちらが詠歌当時の原型に近いか判断し難いが、(A) Ⅱ (A) に対する返歌である(Y)から考えてみたい。(Y)が返歌とすると、それに対する贈歌としては(A)と(A)のどちらが相応しいのであろうか。贈答歌には相手の歌の一部をそ

のまま取り込み、鸚鵡返しのように返返するという特徴がある。そう考えると、(A)と(Y)は「としごとに」という語が共通し、『隆信集』の方が贈答時の原型に近いのではないだろうか。また結句の「こそすれ」「こそはしれ」という係助詞の使用も似ている。『隆信集』では(A)と(Y)に「としごとに」が、(B)と(C)に点線部「ゆく秋の別れ」がそれぞれ共通し、贈答歌として素朴な形であり、原態を示していると考えられる。一方『大輔集』では(A)(B)(C)で「ゆく秋の別れ」という語句が共通しており、これはこれで共通の語句で統一されている。(A)と(A)の異同は、おそらく大輔自身が家集編纂時に三首の統一を図り、自詠を改作したのではあるまいか。結果としては両集それぞれが同語によってまとめられている。

また両集では、詞書による詠歌状況の描き方にも差異がある。『大輔集』の詞書では、秋を惜しむ歌を詠むことが場の目的という印象を受ける。また(Y)がないことにより、(A)が大輔の独詠歌のようになっていく。さらに(B)に対して(C)(X)と二首返歌されていることになり、単純な一対一の贈答ではなく、人々が自由に歌を詠み合う雰囲気を作らせている。一方、『隆信集』の詞書には「歌よみ連歌などして」とあり、秋の別れを惜しむ歌を詠み合うというよりは、人々が雅遊を求めて集ったかのように描かれている。また贈答相手の大輔の名は明記されず、女房の一人とされている。女房らと共に雅事に耽る様は、あたかも王朝物語の一場面の

ようである。また（A'）に対して誰も返歌できない中、隆信一人が応えるという構図も自己を美化しており、演出的である。さらにその女房が、帰ろうとする隆信を「なほよびとゞめて」（B'）を詠みかけ、隆信もそれに返歌している。ここで定長歌（X）がないことで、あくまで隆信と女房との一对一の贈答のようであり、公達と女房にありがちな戯れの恋のやりとりには見えない。このように女房から歌を詠みかけられるという隆信の姿は、家集内で他にも見られる。

とばの院かくれさせ給ひて、世中みなりやうあむなりしに、つぎのとしの春、とばどの、花ざかりなりしころ、花のしたにた、ずみありきしを、女房のなかり、花一えだおりてとこはれたりしかば、花の枝にむすびつけてつかはし、

宿もやと花も昔のはな、れどかざす袂の色ぞかなしき

（隆信集Ⅱ・三七三）

月あか、りしよ、ある宮ばらにて、きよみちの卿、やすみちの卿などかぐらうたひてあそびし程に、たれもいとけふなきさまに、すさびつ、いそぎたちしかば、女房の中より

もろ人の心もとけぬこよひかな天の岩戸も明すや有らん

かへしすべきよし、人くす、められしかば

天の戸の明ぬとみゆる月影の心とけてやたれもいづらん

（隆信集Ⅱ・七九二〜七九三）

ある人のもとにまかりて、よもすがら歌よみ連歌などして、暁かへりし程に、牛をゐて帰にけるとて、まちし程やすらひしに、女房中より

いまよりはうしともいはじあかなくにかへるをとむるものには有ける

かへし

あかなくにかへるをとめぬ宿なればいとゞうしとぞおもひなりぬる
（隆信集Ⅱ・八三八〜八三九）

特に後の二つは『隆信集』八〇六〜八〇九（『大輔集』八〇〜八三三）の九月尽の詠と共通する点が多い。『隆信集』七九二〜七九三は「ある宮ばら」で神楽を歌い遊んだ帰りに女房の中から歌が詠まれ、その場を代表して隆信が返歌している。『隆信集』八三八〜八三九でも人々が「歌よみ連歌など」雅遊を行った帰り、女房の中から帰りを惜しむ歌が贈られ、隆信が返歌している。人々が参集した雅遊の帰り際に、女房の一人から帰りを惜しむ歌を詠みかけられるという状況は、九月尽の詠と極めて似通っている。もしくは事実はいくらか異なることも、意図的に似せて記録したのかもしれない。

また『隆信集』において人物名の臙化はしばしば見られる。九月尽の詠は『大輔集』と併せて詠むことで、贈答相手の女房が大輔であることが分かるが、先に挙げた三例において隆信に歌を詠みかけた「女房の中」の一人が誰かは分からない。また全て同一人物かも

しれないし、別人かもしれない。人物名を明記しないことにより、かなり自由に読めるようになっていく。これらは共に恋部ではなく雑部に入っており、恋に分類される内容ではないのだが、贈答相手があつきりと分らないため、仄かな恋の要素を読み取ることもできよう。女房との風雅なやりとりを通し、自らの色好みの一面を演出すべく、このような描き方をしたとすれば、『隆信集』は読者を意識し、自己をどのように見せるかという点に拘泥した家集と言える。

一方、『大輔集』では個人名はできるだけ明記されているし、公達との恋めいた戯れのやりとりは見られない。家集から読み取れるのは和歌と仏道への傾倒であり、家集において自己を美化し、王朝物語的世界を描こうという意図は見出し難い。このような性格の差が、両集における個人名の臃化や、収載歌の差異に繋がったのであろう。なお『隆信集』との比較では、大輔詠のみに異同があつた点に留意しておきたい。

三 源頼政との贈答歌

次に源頼政との贈答歌を確認する。頼政は摂津源氏仲正の子であり、歌林苑に深く出入りした歌人である。⁽⁸⁾大輔とも親密で、二人の贈答は『大輔集』に四組あり、そのうち三組が『頼政集』にも収められている。

殿上ゆるされたるひとに

(A) よそにきくそでにもつ、むうれしきは身にあまりぬやあまの
ははころも

かへし

よりまさ三ゐ

(B) たもとをばゆたにこそたてうれしさをつ、みもあえぬあまの
ははころも (大輔集I・一五五―一五六)

殿上のことを女房の大輔がもとより悦つかはすとて

(A) よそにきく袖にもあまるうれしさをつ、みあへずや天のは衣

返し

(B) 袂をばたちこそかふれうれしさをかさねてつ、む袖のせばさ
に (頼政集I・五九三―五九四)

大輔歌、頼政歌ともに傍線部のように異同がある。前節で取り上げた九月尽の贈答歌で、(A) 〓 (A') の大輔詠以外ほぼ異同がなかったのに比べると、この差は大きい。片方の記憶違いという可能性もないわけではないが、記憶違いや詠草の紛失等の問題は、互いの家集を見れば解決されよう。やはり何らかの意図で歌を改めたと考えたい。一見すると、点線部「あまのはころも」という語が繰り返されている『大輔集』の方が、贈答当時の素朴な原型に近い様に見えるが、さらに詳細に分析したい。

まず(A)の「そでにもつ、むうれしき」と、(A')の「袖にもあまるうれしき」の差異だが、どちらも意味はとれる。だが「袖にあまるうれしき」という用法は次のように数例あるものの、それ

ほど数は多くない。

むらさきの袖にもあまるうれしさにたちぬかなづる今日にもあ
るかな
(文治六年女御入内和歌・二・実定)

うれしきは袖にあまりぬほど、ぎすなきかさねたるころも手の森
(守覚法親王集Ⅰ・三七)

梅が、も袖にあまれるうれしさを千世の春とぞこゝろをくべき
(再昌第九 永正六年(実隆Ⅰ)・一四八四)

うれしさや袖にあまりて立波の天の河とを待渡るらん
(今川為和集・一八八〇)

一方、「袖につつむうれしき」の例は比較的多い。

うれしさをむかしはそでにつつみけりこよひはみにもあまりぬ
るかな
(和漢朗詠集・七七三)

うれしさを袖につつみて過ぎきいきいまは何かは身にもあまらん
(永久百首・六〇五・仲実)

色そへて袖につ、みしうれしさを紫にてはあまりぬる哉
(頼政集Ⅰ・六〇二)

うれしさを袖につつまんおもふ事みづのかしはにけふぞこととふ
(俊成五社百首・七一)

うれしさも袖につ、まで過にけり苔の衣をいむとせしまに
(寂蓮集Ⅱ・五五)

墨染の袖につ、めるうれしきは後の世にこそ身にはあまらめ
(拾玉集・六五七)

うれしきはそでにつつみしたまぞともけふこそききて身にあま
りぬれ (続古今集・巻第八・釈教歌・七七〇・前権僧正快雅)

特に「袖につつむうれしき」が「身にあまる」という組み合わせは『和漢朗詠集』を初めとして先例、類歌が多い。『大輔集』(A)はそれらをもとに、大輔自身が自詠を推敲した後の歌ではないだろうか。

大輔詠がもとは(A)であったとすれば、返歌としては(B)よりも(B)の方が、「うれしさをつつみあえぬ(あへず)やあまのはごろも」が贈歌答歌に繰り返され、素朴で原型に近いと思われる。つまり元々は次のような形であったと推測できる。

大輔

(A) よそにきく袖にもあまるうれしさをつ、みあへずや天のは衣

頼政

(B) たもとをばゆたにこそたてうれしさをつ、みもあえぬあまの

はごろも

従って、両者は家集編纂時に、それぞれ自詠を改作したと考えられる。大輔に関しては、先述したように先例歌を参考に推敲した可能性があるが、頼政はどのような方針で改作したのであるか。ひとつには、単調さを避けようとした可能性がある。同語の反復は贈答歌の法則に則っており、贈答当時においては問題なかったが、家集に収める際にはそれが単調さをもたらすと考えたのではないだろうか。しかしそれ以外の理由を、『頼政集』の配列から繕いてみたい。次に挙げるのは『頼政集Ⅰ』において昇進、昇殿に関する歌群の一

部（五八三―六〇〇番）である。分量が多いため和歌のみ引用し、贈答相手の作者名は省略した。

木がくれにもりこし月を雲井にておもふ事なくいかにみるらん
木がくれとなになげきけんふたよまで雲の上にてみぬる月□
□る月のいではじめたる雲井にはまたおぼろげの人はかよはず
ながきよに出はじめたる月影にちかづく雲の上ぞうれしき
□□の浦にたちのぼるなる浪の音はこさる、身にもうれしとぞ
き□

いかにしてたちのぼるらんこゆべしとおもひもよらぬわか
らなみ

位山のぼるにかねてしるかりき雲のうへまでゆかん物とは
翁さびはうくのぼるくらゐやま雲ふむほどにいかでなるらん
くらゐ山たかくなりぬとみし程にやがて雲井にのぼるうれしき
のぼりにし位の山も雲の上も歳のたかさにあはすとぞ思ふ

(A) よそにきく袖にもあまるうれしさをつ、みあへずや天のは衣
(B) 袂をばたちこそかふれうれしさをかさねてつ、む袖のせばさに

いかばかり袂もせばくおもふらん雲井にのぼる鶴のけ衣
しりけりな雲みをおりて鳴たづの立のぼるまでおもふ心を

雲のうへをおもひたえにしはなちどりつばさおいたるこ、ちこ
すすれ

雲のうへに千代も八千代もあそぶへき鶴は久しき物となくらん
木がくれてみし夜の月のかはらずはおなじ雲井を哀とやおもふ

木がくれてその夜の月になれにしに雲井をみては哀とぞおもふ
これらを見ると、傍線部のように言葉の連想で配列されているよ
うには見えないだろうか。もちろん昇進を祝う歌群であるため、似
たような語句が頻用されるのは当然のことだが、緩やかながらも類
似語の連続による配列があったと考えても良からう。このような現
象は『大輔集』にもあり、森本も指摘する⁽⁹⁾。

かづらきやたかまのみねにゐるくものよそめにだにもみえしよ
しきみ

よそ人にとふばかりなるもの思ひを我ゆゑとだにしらせてしが
な

くれにはとたのめをかぬあか月のそのきぬくはいかくしほ
る、

わすれずななをざり事をたのめをきてそらをしみせしあか月の
そら

にくかりしやもめがらすもうれしきはたくひとりぬるあか月の
そら

わすれじとつねにはいひし事ぐさのやがてのきばにかれもゆく
かな

うらみずよなげのなさけのこれをだにながらへはて、きかん物
かは

あはぬにはかへすといひしころもをひきとめてだにうらみか
けばや

いにしへもきみがためしやありそめてこひてふ事のよにふりに
けん

こひしきもうきもしらすきみになどなげかぬことをならはざ
りけん

はかなしなたゞきみひとりよの中にある物とのみ思はじや我
ことはりやわが身うきぬのあやめぐさこまほしからず思ふなる
べし

こゝろみよゆはたのひもとときそめてふかくしみなん色はかは
らじ

ちはやぶるちひろたくなはも、むすびうちとけてみよながき心を
(大輔集Ⅰ・一三三三〜一四六)

森本は、「一首から次の一首へ、同類の語句で連続する配列がと
られている点にも注意される。」「いずれも偶然とのみはいきれぬ
現象である。」と論じている。このような緩やかな言葉の連想によ
る配列は、私家集編纂における一つの方法であったと考えられる。
『頼政集』の(B)歌も、結句が(B')の「あまのはごろも」では
なく、「袖のせばさに」とあることにより、次の一首の二句「袂も
せばく」に繋がっていく。こうした語句の連続を図って、頼政が家
集編纂時に(B)から(B)へと意図的に自詠を改作したのではあ
るまいか。両者の記録方法の違いをもう少し見ていきたい。

ひとくよもすがらあそびあかして、二日ばかりありて

よりまさ三ぬ

(A) きみにあかでかへりにしよりむかしせしこひにさにたるもの
をこそ思へ

かへし

(B) すぎにけるためしはしらずあかざりしなごりはそれにはじめ
てぞ思ふ (大輔集Ⅰ・一六三三〜一六四)

和歌所に人くあつまりて、夜もすがら歌よみ連歌など
してあそべれ侍しに、隣なりけるをきな、たびくよば
れければまゐりて、人なみくまじろひ侍に、ある宮
ばらの女房二三人を、ひき物のうちにすゑて、おなじく
連歌しなどして、いまよりはながくしる人にせんなど申
かたらひて、夜もやうく明がたに成しかば、まかりか
へりて後、二三日ばかりありて、一人がもとへつかはし
ける

(A') 君にあひてかへりにしよりむかしせし恋にさにたるものをこ
そ思へ

返し

(B') われはいさむかしもしらずあかざりし名残はそれに始てぞお
もふ

それをき、き、ていまひとりの女房、さにといふ事をい
まくしがりて、さ文字をばきかじといひければ、さら
ばよみこそなをさめとて

(X) かくしあらばはやぞけなましそのかみの恋にはさにぬわが物

おもひ

かへし

(Y) などやささはさになると聞しいにしへをいとひけるさへいまは恋しき
(頼政集Ⅰ・六五九〜六六二)

大輔、頼政、或る女房らの贈答であり、「和歌所」とは歌林苑のことを指す。『大輔集』の簡素な詞書に対して、頼政集ではかなり詳細に叙述している。(A)と(A)、(B)と(B)がそれぞれ同じ歌と判断できるが、それぞれ異同がある。頼政詠(A)と(A)は「あかで」と「あひて」という差があるが、大輔詠(B)は(B)の三句「あかざりし」と対応するのは(A)の「あかで」の方であり、頼政詠の原型は『大輔集』(A)であったのではないだろうか。一方、大輔詠(B)と(B)は初句と二句が異なる。「われはいさ」という詠み方はやや口語的であり、その場で口から出たようであるのに対し、「すぎにけるためし」という表現は口語的な印象が取れ、詠歌時から距離を置いた表現に見える。推測の域を出ないのだが、これも大輔が家集編纂時に自詠を改稿したのではあるまいか。また『大輔集』が詞書を必要最低限の簡略なものにし、贈答相手の名を明記しているのに対し、『頼政集』の状況説明はかなり詳細で、人々が戯れる風雅の場を克明に描写し、贈答相手の女房の名は記されない。女性の名を明記せず、単に「女房」と記す態度は、前節で取り上げた『隆信集』と共通する。大輔が純粹に和歌の記録を目的としているのに対し、頼政は人々が詠歌に興じる風雅

の場と、そこに身を置く自己を描くことに執心しているようである。また「恋にさにたる」などの表現から、ここでも『隆信集』同様、恋の雰囲気を醸し出そうとしているようにも読める。恋を匂わせる場面で女性の名を伏せるのは、当時の家集における表現方法の一つであったかもしれない。この贈答の時期は、大輔が歌壇に姿を現したと思しき永暦元年(一一六〇)から頼政が没した治承四年(一一八〇)以前と、かなりおおまかにしか示せないが、この間、大輔は三十〜五十歳、頼政は五十七〜七十七歳である。人物名の臚化には、こうした年齢的な現実性を取り除く効果もあつたろう。大輔と頼政の贈答が互いの家集に収められた例はもうひとつある。

よりまさ三あ

(A) これをみよ人もさこそはつまごひにはるのきぎすのなれるすがたよ

(B) とにかくにかりのうきよぞあはれなるはるのきぎすをみるにつけても
(大輔集Ⅰ・二〇二〜二〇三)

ある人の許より、千鳥をつかはすとて申遣はしける
(A) 是をみよ人もさこそは妻こふる春の雉のなれるすがたを
返し、人にかはりて女房大輔

(B) われはたゞかりのうき世ぞあはれなる春の雉子のなれるさまにも
(頼政集Ⅰ・六五七〜六五八)

『大輔集』の方は詞書も「かへし」も無く、書写の過程でそれらが脱落してしまったと思しい。だが『頼政集』により、詠歌状況が

おおよそ判明する。『頼政集』の「或人のもとより」というのはそのままだでは意味が取れないため、「或人のもとへ」の誤りであろう。頼政がある人に和歌を添えて千鳥を贈ったところ、その人に代わって大輔が返歌してきたということである。一見して『頼政集』の方が、結句「なれるすがたを」「なれるさまにも」が対応しており、原型に近いように思われる。また、(B) 結句は「みるにつけても」の方が歌意は取りやすい。これ以上の推測は難しいが、これも大輔の手による自詠の改作ではあるまいか。ともあれ、大輔の歌に大きな異同がある点に注意しておきたい。

四 業平旧跡をめぐる贈答歌

最後に、大輔の業平旧跡をめぐる贈答歌を確認していく。大輔は『伊勢物語』に関心が高かったようである。

ながつきの十日ころ、すみよしにひとくぐしてまうで、
はまのかりやごもめづらしくて、つぼどもおほくとりなら
べたるに

いちのつぼをちいりてこそゆかしけれこのよのほかのすまゝほ
しさに

又けこのうつはものなどをきつ、しみの葉にも、らぬに
や、すみなれたるさまでもしたるに

ことはりやをのがさどくふりすて、すみよしとのみ思ひがほ

なる

かへし

右京権大夫もろみつ

宮をばみなわすれぐさつみつらんげにすみよしのうらのすま

ゐに

(大輔集I・二二三〜二二五)

傍線部「けこのうつはもの」は『伊勢物語』二十三段の所謂「筒井筒」の一節を引いている。また、脱落のため詳細は不明ながら、次の記述は大輔が『伊勢物語』ゆかりの地に深く関わるうとした形跡と言える。

大輔〔朽〕申しけるいせ物語のことたづねむ、とてよび侍
りける人のもとにまかりて、かへるとてつづみがみにかき
つけ侍りける 法橋名円

いせのうみのちひろのそこはしらねどもくるばかりなるあまの
たくなは (檜葉集・九一〇)

このように大輔が業平ゆかりの地を熱心に巡っていたことは、次の贈答からも判明する。なお、この贈答は『寂蓮集』にも残る。

ならのほとけをがみにまゐりたるついでに、ざい中将の
だう、おきつしらなみ心にかけ、るすみかなどみて、ぐ
したる人のもとへつかはし、

(A) しはれたる花のにはひをとゞめけんなごり身にしむすまゐを
ぞ思ふ

かへし

入道しやれん

(B) いにしへのなごりもこひしたつた山よはにこえけんやどのけ

しきは

(大輔集 I・二一六～二一七)

昔、業平朝臣河内国高安の郡にかよひける比、奥津白波
心にかけてくる古郷、所の人、中将のかきこちとなん申つ
たへて、今に侍るを、中の春の十日余りに、諸共に見に
まかりたる人の許より

(A) 折花の句のこれる故郷の心にしみし名残をぞ思ふ

返し

(B) いにしへの名残もかなし龍田山夜半に思ひし宿の気色は

(寂蓮集 I・七二～七三)

大輔詠 (A) と (A) は語句に相当の異同があり、同じ歌と見な
すのが躊躇われる程である。しかし詞書にある詠歌状況はほぼ同じ
であるし、寂蓮の返歌 (B) と (B) は同じ歌と判断できるため、
(A) と (A) も元は同じ一首であったと考えられる。これほど差
異があるということは、記憶違いではなく、意図的に手を加えた可
能性が高い。(A) の「しほれたる花」、(A) の「句のこれる」は、
それぞれ『古今和歌集』『仮名序』の「ありはらのなりひらはその
心あまりてことばたらず、しほめる花のいろなくてにほひのこれ
るがごとし」を引いている。どちらが改作後の歌かは判断が難しい
が、『大輔集』(A)の方が推敲された後の感がある。と言うのも、
(A)では、初句「しほれたる花」が「仮名序」の表現「しほめる
花」をすぐさま想起させ、「しほれたる花(業平)」の旧跡という点
が前面に出ている。また結句で「すまゐ」という語があることによ

り、詞書の「すまか」、(B)の「宿」との連携もとれ、業平の旧宅
を訪れた事実がより強調される。一方(A)では、「句のこれる」
が「仮名序」の表現を引いているものの、初句「折花」が業平の比
喩であることは、(A)の「しほれたる花」に比べると分かりにく
い。また『隆信集』『頼政集』の例同様、ここでも大輔詠に相当の
異同がある点を鑑みると、この寂蓮との贈答歌でも大輔が自詠を改
めた可能性を提示したい。このように大輔詠に大きな異同がある例
は他にもある。

このついでに、ざい中将はなのころすみかなど、ふるき
あとゝもたづねゆきて、ひとくうたなどよみてかへり
て、この経くやうしつる人のもとより

じちえいとくごふ

(A) むかしをばこひつ、なきてかへりきぬたれかはけふをまたし
のぶべき

かへし

(B) たれかまたけふをしのばんむれあつるちけかうへのともなら
ずして

(大輔集 I・二三六～二三七)

元暦二年五月ならの人人殷富門院大輔にさそはれて、おな
じ人のはかにまかりて、そとばたててかへりけるに、大輔は
やがて太子のみはかさまにまうでけるが、かのたかやすの
かたながめやりてうちやすむほどに、実叡法師がもとより
(A) むかしをばこひつともにかへりきぬたれかはけふをまたし

のぶべき

かへし

大輔

(B') げにたれかけふをしをしのばむむれあつつのべのくさばのつゆの
みにして (檜葉集・九二八〜九二九)

両集を比較すると、(B) Ⅱ (B') の大輔詠に大きな差異がある。『檜葉集』の成立は、跋文によると嘉禎三年(一二三七)六月五日とあり、『大輔集』の成立からは時が経っている。また集の編纂資料などもかかわってくるため、これまでの例と同様には比較し難い。また、『大輔集』(B) 四句目も脱落があるのか意味が取りにくく、両集の比較は慎重にしなければならない。ここではこれまでに確認してきた例と同じく、大輔詠にかなりの異同があり、大輔による自詠改作の可能性を提示するに留めておく。

五 おわりに

以上、本稿では『大輔集』収載贈答歌で、他家集にも収められている歌を比較検討してきた。まず『隆信集』との比較では、大輔詠のみに大きな異同があることが確認できた。そしてそれは、「ゆく秋の別れ」という語によって、関連する贈答歌をまとめるための、大輔自身による改作の結果と位置づけた。一方で『隆信集』は和歌の改作というよりは、詞書や人物呼称の臙化により自己を美化し、演出する傾向が見られた。『頼政集』との比較では、大輔詠、頼政

詠双方に異同が見られたが、大輔詠に関しては『頼政集』収載歌の方に同語の繰り返しがあり、贈答当時の原型を留めていると考えた。そして『大輔集』収載大輔詠は、大輔が家集編纂時に古歌や先行歌を参考にして改作した可能性が高いことを示した。また詞書も『頼政集』に比べ簡潔なものが多く、純粹に和歌を記録することに重きを置いた家集と言えよう。また『大輔集』『頼政集』ともに、類似する語句が連続して配列される例が確認できた。これらは偶然とは言い難く、言葉の連想による配列が、当時の家集における配列方法の一つであった可能性がある。さらに業平旧跡をめぐる寂蓮、実叡との贈答歌では、大輔歌にかなり大きな異同が見られたが、これまでの例と併せて考え、これらも大輔の手による改稿と想定した。『大輔集』と他家集を比較すると、総じて大輔詠に相当の異同が見られる例が多く、それらは大輔自身の手による、自詠改作と考えるのが妥当であろう。その際は、ひとまとまりの贈答歌群の中に同語を繰り返して全体をまとめたり、古歌や先行歌、先行作品などを参考に手を加えたりしていたようである。

かつて拙稿では、実定の『林下集』は弟実家の歌を大胆に改作し、実際とは贈答順序も入れ替えていることを確認した。そして当時の家集編纂において、他人詠に手を加えるという行為が十分あり得たことに言及した¹⁰⁾。だが大輔の場合、他人詠の大幅な改作は行っていないと考えられる。やはり実定、実家の事例は、同母の兄弟という極めて近い関係であったことが影響しているようか。ただ

し、大輔が他人詠に手を加えた可能性も完全には否定できない。本稿では紙幅の関係上叶わなかったが、今後は『隆信集』『頼政集』『寂蓮集』の編纂態度も併せて考えつつ、大輔の他人詠改作の可能性を探りたい。

こうした私家集編纂過程における意図的な改作に関しては、個別的事例の検討は勿論、同時代の複数の事例を複合的に考察することで、当時の私家集編纂の方法や傾向が解明されよう。今後さらに検討を進め、平安末期における私家集編纂について考究していきたい。

注

- (1) 拙稿「林下集」「実家集」と諸家集―平安末期の私家集編纂意識一斑―『国文学研究』一七六 二〇一五年六月。
- (2) 『大輔集』と大輔に関する研究としては、保坂都「殷富門院大輔の伝記と歌」〔学苑〕二二六 一九五九年一月）、森本元子「殷富門院大輔集」の形態と成立」〔お茶の水女子大学人文科学紀要〕一七 一九六四年十一月。「私家集の研究」(明治書院 一九六六年)収録、平間千秋「殷富門院大輔の和歌活動について―後半期を中心に―」〔古典論叢〕一五 一九八五年六月)、森本元子「殷富門院大輔集全釈」(風間書房 一九九三年)、久保田淳「殷富門院大輔の南都巡礼歌について―南都巡礼記の『后宮』に関連して―」〔中世和歌史の研究〕明治書院 一九九三年)、村尾誠一「殷富門院大輔の南都巡礼歌をめぐって」〔東京外国語大学論集〕五八 一九九九年三月)、拙稿「亮子内親王家の女房たち―殷富門院大輔の周辺―」〔国文学研究〕一六二 二〇一〇年十月)等。また日本文学学会図書館・辞典ライブラリー「殷富門院大輔」(家永香織執筆)、「殷富門院大輔集」(家永香織執筆)も参照。

『殷富門院大輔集』の編纂態度

- (3) 『大輔集』一類本(新編私家集大成)大輔I)の伝本としては、書陵部蔵本(五〇一・一三七)と、その親本である冷泉家時雨亭文庫本がある。
- (4) 『大輔集』二類本(新編私家集大成)大輔II)の伝本は、丹鶴叢書所収本、群書類従本、三手文庫本、慶應義塾大学図書館本などがある。
- (5) 隆信に関する研究としては、井上宗雄「常磐三叔年譜考―付範玄・三河内侍・隆信略年譜―」〔国文学研究〕二二 一九五八年三月。「平安後期歌人伝の研究(増補版)」(笠間書院 一九八八年)収録、樋口芳麻呂「うきなみ物語考」〔国語国文〕三九 一九七〇年二月)、樋口芳麻呂「隆信と石京大夫の恋」〔愛知教育大学国語国文学報〕三〇 一九七六年十一月)、中村文「藤原隆信年譜 付・その和歌について」〔立教大学日本文学〕三八 一九七七年七月。「後白河院時代歌人伝の研究」(笠間書院 二〇〇五年)収録、家永香織「藤原隆信伝の問題―類従本系『隆信集』三五三番と三五九番歌をめぐって―」〔解釈〕三九 一九九三年二月)。「転換期の和歌表現―院政期和歌文学の研究―」(青簡舎 二〇一二年)収録、樋口芳麻呂「隆信集全釈」(風間書房 二〇〇一年)、樋口芳麻呂「藤原隆信とその家集」〔和歌文学研究〕八五 二〇〇二年十二月)等。また日本文学学会図書館・辞典ライブラリー「藤原隆信」(中村文執筆)、「隆信集」(中村文執筆)も参照。
- (6) 森本元子「殷富門院大輔集全釈」(風間書房 一九九三年)。
- (7) 日本文学学会図書館・辞典ライブラリー「寂蓮」(安井重雄執筆)参照。
- (8) 頼政に関する研究としては、川田順「源三位頼政」(春秋社 一九五八年九月)。「私家集の研究」(明治書院 一九六六年)収録、多賀宗準「源年九月」(吉川弘文館 一九七三年)、渡辺雅子「源三位頼政の生涯と和歌」〔北見大学論集〕一 一九七八年十月)、上条彰次「武家歌人源頼政論」〔静岡女子大学国文学研究〕一八 一九八五年三月)、井上宗雄「平安後期歌人伝の研究(増補版)」(笠間書院 一九八八年)、小林保治「頼政像の虚構性」〔国語と国文学〕八一― 二〇〇四年一月)、錦織周一「歌人

としての源三位頼政の生涯」(『源三位頼政集全釈』二〇一〇年一月)等。
また日本文学センター図書館・辞典ライブラリー「源頼政」(山田洋嗣執筆)
も参照。

(9) 注(6) 森本著書。

(10) 注(1) 拙稿。

※私家集の引用は『新編私家集大成』に拠り、歴史的仮名遣いに改め、私に清濁を付した。その他の和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。